法華寺庭園の調査

―第618次

1　はじめに

法華寺庭園は、法華寺客殿にともなう庭園で、客殿玄関へ向かう「前庭」、客殿の書院に面する「内庭」、客殿の上の御方の南西に展開する「主庭」からなる。そのうち「主庭」は、法華寺本堂西辺の築地塀に囲まれた一画にあたる。中央に池を配する池庭で、上の御方からの眺望を意図し、南の正面に位置する出島上の築山には枯滝石組と枯流れが配置され、その背後には常緑樹の混植による高生垣がまわる。上の御方から南西方向には、土橋越しに岩島や対岸の築山石組を望むことができる。

このような客殿からの眺めを意図した空間構成から、本庭園は客殿と一体的な空間として計画されたと考えられるため、客殿が当地に移築された寛文13年（1673）にほど近い、高慶尼（近衛信尋息女）の住職在任期（17世紀半ば～18世紀初め頃）、すなわち江戸時代前期に造られた庭園であると評価されてきた。ただし、本庭園の造営年代を直接示す史料は確認できておらず、考古学的な調査もこれまでおこなわれていなかった。

本庭園は、1954年には奈良県の指定文化財（名勝）に、2001年には国名勝に指定され保護が図られてきたが、マツの枯死やカキツバタの衰弱、池護岸の崩れなど、日常の維持管理では対応しきれない問題が多く生じてきた。

そこで光明宗法華寺と奈文研の連携研究として、2016年度より庭園および関連する調査を実施し、2018年に『名勝法華寺庭園保存活用計画』をとりまとめた。これにもとづき、2019年に「名勝法華寺庭園保存整備委員会」が組織され、保存整備事業を開始することとなった。

初年度の2019年度には、保存整備事業の一部として、池護岸の崩壊要因の把握および構築技法の解明を目的に、池南半部の岸に３ヵ所のトレンチを設定し、発掘調査をおこなった（図212）。調査面積は合計７㎡（１トレンチ：1.0×3.0m、２・３トレンチ1.0×2.0m）。調査は2019年12月16日に開始し、翌年１月14日に終了した。

（大澤正吾・高橋知奈津）

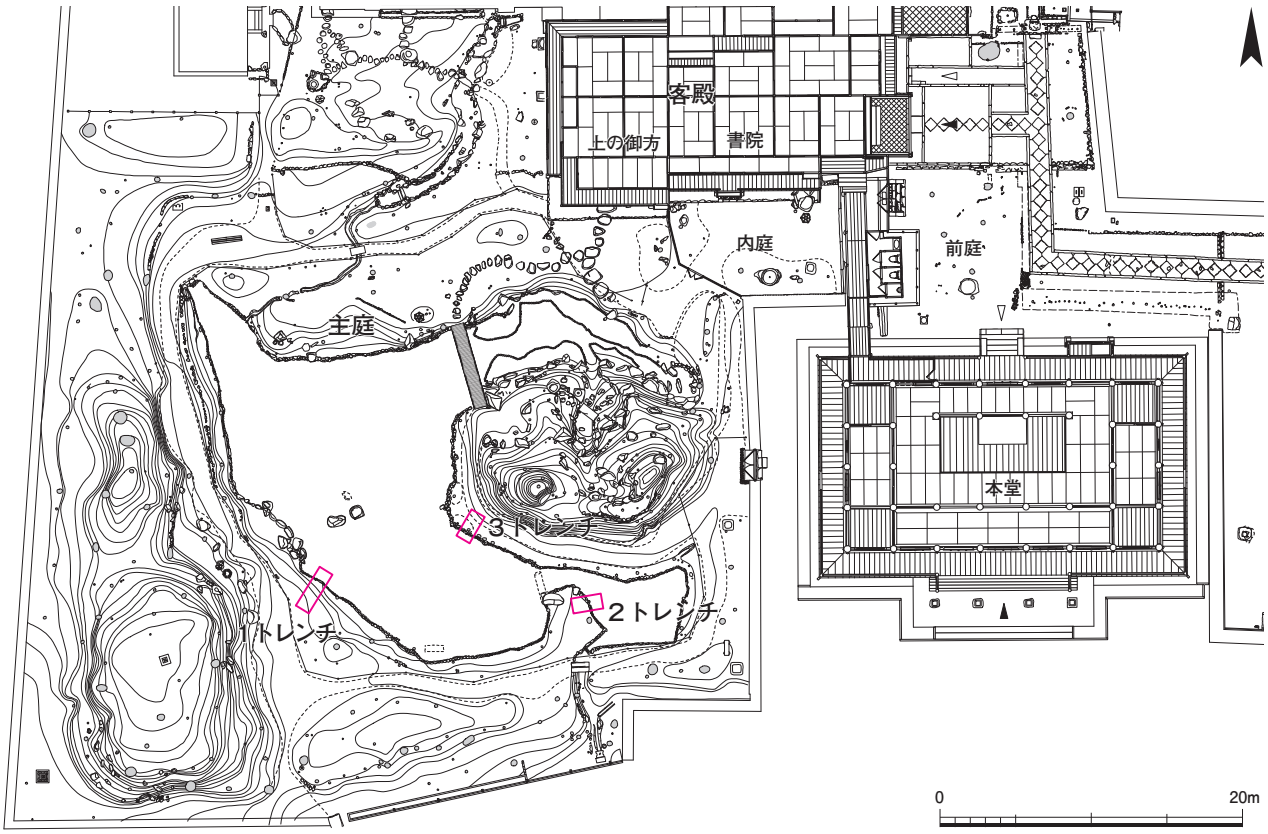

図212　平城第618次調査　トレンチ配置図　1：500

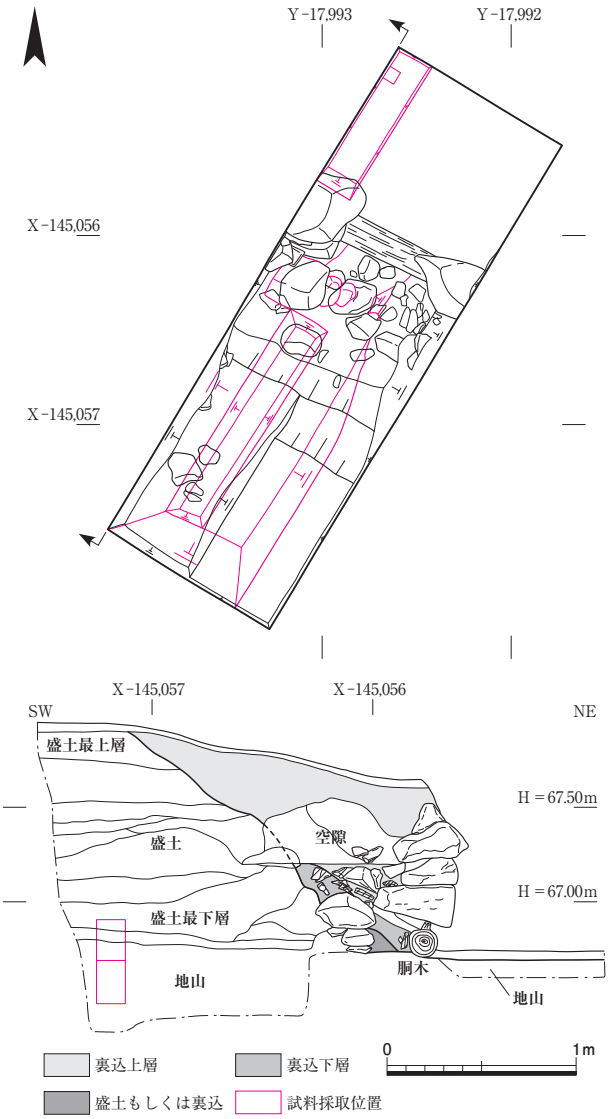

図213　１トレンチ　遺構図・断面図　１：40

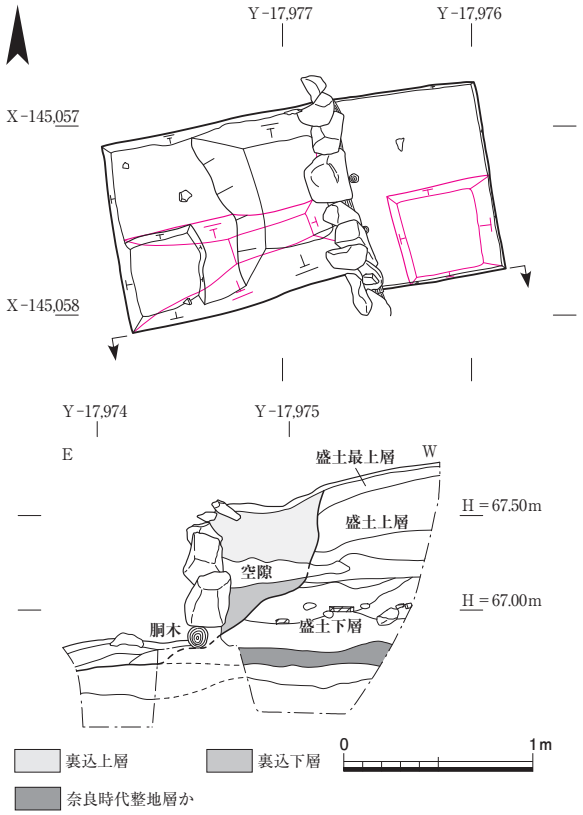

図214　２トレンチ　遺構図・断面図　１：40

２　発掘調査の成果

１トレンチ　池の西部に設定した1.0×3.0mのトレンチ(図213)。池の石積護岸は、基礎となる胴木の上に、自然石を３～４段積み重ねて構築されている。胴木は、地山である明緑灰色細砂層上に設置する。裏込は下層が灰白色粗砂、上層がしまりの悪い褐色粘質土からなり、いずれも瓦片や土器片、礫を多く含む。このしまりの悪さが本来のものなのか根攪乱によるものかは不明。

この裏込上層と下層の境界付近に、奥行1.1m、高さ0.1～0.3mの空隙を確認した。池の水位の上下により浸食され、裏込が流出したためと考えられる。裏込からは、古代～近世前半以降の土器、瓦が出土した。土器、瓦ともに近世後半以降に下る可能性もある。

この裏込を除去したところ、現状の石積護岸の背後に２列目の石積を検出した。この石積は、現状の石積護岸に比べ小ぶりな自然石を数段重ねたもので、後述する陸部盛土に埋め込まれる、ないし盛土前面に接する。この石積の性格については以下の３案が考えられる。

１案　盛土にともなう土留。

２案　現状の石積護岸と時期差をもつ前身の石積護岸。

３案　現状の石積護岸の裏込の一部。

今回の検出状況からはいずれの案も考えられ、その決定にはさらなる検討を要する。

池の岸から陸部は、高さ1.1mほどの盛土により造成する。盛土出土の遺物は、古代～中世のものが主体だが、最下層から少量ながら近世前半と考えられる平瓦が出土しており、この盛土は近世前半になされた可能性が高い。

また、この盛土は地山直上から施工されており、８世紀を含む前身の遺構面を大きく削平し、大規模な造成がなされたとみられる。ただし、この盛土の最上層については、少量ながら19世紀頃、幕末～明治まで下っても良い土器が出土しており、新たに盛土したものの可能性がある。池の底面には、地山が露出している。

２トレンチ　池の東南部に設定した1.0×2.0mのトレンチ（図214）。池の石積護岸は、基礎である胴木の上に自然石を３～４段積み重ねて構築されている。石積護岸の裏込は下層が灰白色粗砂、上層が真砂土に似る明黄褐色砂質土からなる。裏込上層はしまりが悪く、これが本来のものなのか根攪乱によるものかは不明。

この裏込の上層と下層との境界には、奥行0.7m、高さ0.1～0.2mの空隙を確認した。池の水位の上下により

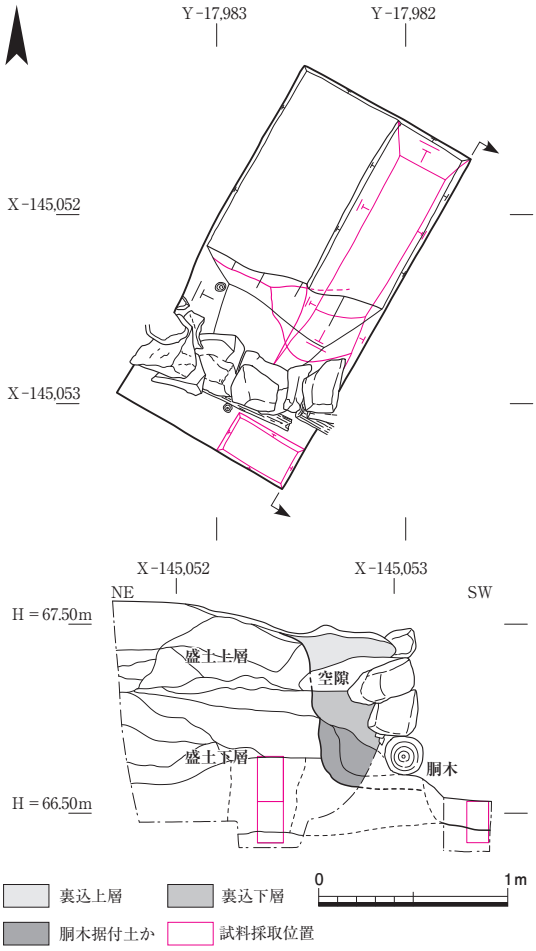

図215　３トレンチ　遺構図・断面図　１：40

浸食され、裏込が流出したためと考えられる。裏込出土遺物は、古代～近世前半の土器、古代～近世後半に下る可能性がある瓦が主体だが、１点のみタイルを含む。

池の岸から陸部は、高さ1.0mほどの盛土により造成する。最上層は真砂土に似る明黄褐色砂質土。盛土出土品は、古代～近世前半の土器、古代～中世の瓦が主体。１点のみ近世に下る可能性がある平瓦を含むが、混入か否かは不明。盛土下層には奈良時代前半の遺物のみを含む層があり、土質からも奈良時代の整地の可能性がある。池底には貼り床などの特別な工法は確認されなかった。

３トレンチ　庭園東部に設定した1.0×2.0mのトレンチ（図215）。池の石積護岸は、基礎である胴木の上に自然石を３～４段積み重ねることで構築する。胴木を据える際には、肩口を掘り込み、底部に灰色粘土や褐灰色粘質土を充填して、高さの調整をおこなったものとみられる。裏込は下層が灰白色粗砂、上層が暗褐色粘質土からなる。裏込上層はしまりが悪く、これが本来のものか根攪乱によるものかは不明。

この裏込上層と下層の境界で奥行0.6m、高さ0.2mほどの空隙を確認した。池の水位の上下により浸食され、裏込が流出したためとみられる。裏込出土品は、古代～近世前半の土器、古代～近世とみられる瓦を含む。

表28　第618次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6138	B	2	6751	A	1	面戸瓦	1
6285	A	1	平安		1	（刻印）	1
葉096		1	室町		1	用途不明道具瓦	2
巴（室町）		1	近世		1	水波文磚	1
（中世）		2	時代不明		6	凝灰岩	1
時代不明		2	（赤色顔料付着）		1		
軒丸瓦計		9	軒平瓦計		11	その他計	6

	丸瓦	平瓦	磚	凝灰岩	レンガ
重量	39.211kg	124.122kg	0.249kg	0.913kg	0
点数	325	1342	1	3	0

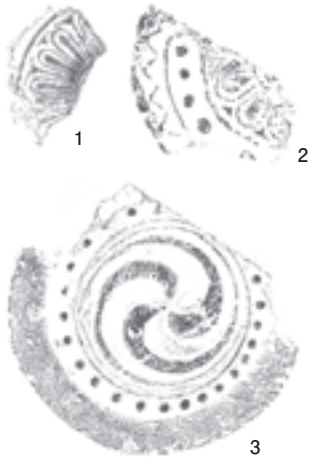

図216　第618次調査出土瓦　１：４

図217　水波文磚

池の岸から陸部は盛土によるが、地表面下約0.5mまでの上層とそれ以下の下層に分かれる。上層は真砂土に似る明褐色砂質土や黒褐色粘質土などからなり、古代～近世前半の土器、古代～中世の瓦が出土した。下層は遺物を含まず時期の特定はできないが、土質からみて奈良時代の可能性がある。池底には、貼り床などの確実な痕跡は確認されなかった。　**（大澤）**

３　出土遺物

以下では、作庭年代や庭園の改修履歴の推定に関わる可能性があるものを中心に述べる。

瓦磚類　今回の調査で出土した瓦磚類の一覧を表28に示す。このうち７割が１トレンチ、２割が３トレンチ、１割が２トレンチからの出土である。

１トレンチ盛土最下層からは、巻頭図版８に示す平瓦数点が出土した。凹面は布目痕がなく、丁寧にナデ調整する。近世前半の所産とみる。１トレンチの裏込下層からは、凹面を丁寧にナデ調整する平瓦および桟瓦が数点出土した。17世紀末以降のものである。２トレンチ裏込下層からは、凹面を丁寧にナデ調整する平瓦が数点出土した。近世後半以降に下る可能性がある。３トレンチ裏込下層からは、脇区幅３㎝の軒平瓦１点および、凹面を丁寧にナデ調整する平瓦が数点出土した。近世の瓦であろう。

このほか、比較的残りが良い瓦磚類として以下のもの

を報告する。図216の１は6285Ａ。光明子邸の所用。軒瓦第Ⅱ－１期(721～729)。２は6138Ｂ。法華寺の金堂所用。軒瓦第Ⅳ－１期（757～767)。３は左巻三巴文軒丸瓦。室町時代。図217は施釉水波文磚。上面に水波文、下面に文字を、ヘラで線刻する。文字は大部分を欠くが、類例から番付と推察する。側面に逃げをとる。釉は剝脱が著しい。法華寺の金堂または講堂の須弥壇を飾った可能性が高い。奈良時代。　**（岩永　玲）**

土　器　整理用コンテナ２箱分が出土した。古代～近世の土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器、瓦質土器、青磁、白磁および陶磁器などがある。いずれも小片で、図化や時期を特定できるものはごくわずかである（図218)。

１～３は１トレンチ出土。１は信楽焼すり鉢。裏込下層出土。17世紀後半以降。２は中国産の龍泉窯系青磁碗Ⅲ類。13～14世紀。盛土出土。３は信楽焼大甕。盛土最上層出土。19世紀以降のものか。４～６は２トレンチ出土。４・５は軟質施釉陶器碗。裏込下層および盛土上層出土。17世紀初頭～前半。６は瀬戸・美濃大窯の灰釉陶器皿。盛土上層出土。16世紀後半～17世紀初頭。７～11は３トレンチ出土。11は武雄系の唐津焼三島手鉢。裏込下層出土。17世紀後半。７～10は盛土上層出土。７は中国景徳鎮窯産の染付磁器杯。16～17世紀。８は伊万里焼染付磁器天目碗。17世紀第２四半期以降。９は唐津焼小杯。17世紀前半。10は中国南方産の白磁皿Ⅸ類。13～14世紀。　**（大澤・尾野善裕**／京都国立博物館**）**

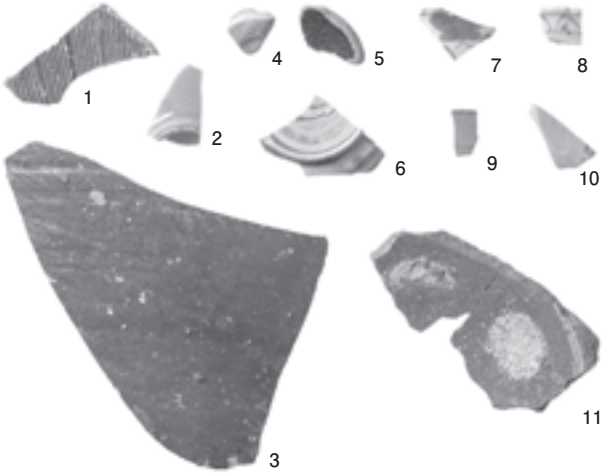

図218　第618次調査出土土器

４　まとめ

現状の池の石積護岸は、胴木の上に自然石を３～４段ほど積み重ねて構築されており、裏込として下層に粗砂、上層にしまりが悪い粘質土ないし砂質土を用いることを確認した。裏込の上層と下層の境界を中心に浸食が進み、奥行0.6～1.1m、高さ0.1～0.3mの空隙が生じている。これが原因となって護岸の石積が一部崩落したことが判明した。本庭園を適切に保存するためには、早急に対応をおこなう必要がある。

１トレンチでは、池岸が地山直上からの盛土により造成されていることを確認した。この盛土の最下層からは近世前半と考えられる平瓦が出土しており、少なくとも池西岸部については、当初の作庭が近世前半におこなわれた可能性が高い。これは、庭園史学の検討から寛文13年（1673）にほど近い江戸時代前期とされてきた法華寺庭園の当初作庭年代を、考古学的に支持するものといえる。

ただし、盛土や護岸に関する改修の履歴については今後の検討課題である。盛土出土遺物のほとんどは古代～近世前半のもので、現在の池岸や陸部がいずれも近世前半の造作とみることも可能である。しかし、１トレンチでは盛土最上層から、19世紀頃、近代に下ってもよい土器が少量ながら出土していること、２・３トレンチでは盛土の一部に真砂土に似た土を用いていることなど、近世前半の状態を保つとみるにはためらわれる要素も多い。

また、１・２トレンチの裏込から出土した遺物には、平瓦や信楽焼のすり鉢など、近世後半以降に下ってもおかしくないものを含んでおり、裏込あるいは現状の石積護岸が後世の改修にともなう可能性は否定できない。１点のみだが２トレンチ裏込下層から出土したタイル片や、２・３トレンチ裏込上層の真砂土に似た土の利用、全トレンチで認められる盛土と裏込の土質の顕著な差異など、現在の護岸を単純に作庭当初ないし近世後半のものとみるには躊躇する要素も多く、明治以降の可能性も排除できない。庭園の改修履歴については、典籍や文書を含めた今後の調査とあわせて改めて検討する必要がある。

近世前半に法華寺庭園を当初作庭する以前にも池が存在し、それを利用して作庭したか否かを判断するための痕跡は確認できなかった。その存否も課題である。

以上、狭小な調査区ではあったが、本庭園の今後の保存活用に資する重要な成果を得ることができた。名勝庭園を適切に継承していくための一助としたい。　**（大澤）**